還暦の研修医

INTERVIEW

水野隆史 十和田市立中央病院総合内科

昨今、医学部受験で女性や浪人生が差別されている状況が報道されているが、五十代で医者になる決意をし、三〇校以上を受験して見事、金沢大学医学部に合格した元農林水産省職員の水野隆史氏に、人生の再チャレンジをした動機や医学部受験の面接での苦労話などを伺った。

聞き手　瀬田　文治　若築建設㈱　執行役員

瀬田　本日はお忙しい中、貴重な休日をこのインタビューにお付き合いいただき、ありがとうございます。

水野先生は、五十歳台でそれまでの農林水産省官僚としてのキャリアを捨てて、医師の道に進まれました。その半生についてお伺いしたいと思います。

まず、生い立ちについて教えてください。

尼崎市で生まれて三国町へ

水野医師　私は兵庫県尼崎市で生まれましたが、もともと家族は東京に住んでいて疎開していたようです。生後半年で父の転勤に伴い、福井県三国町（現坂井市）で育ちました。三国南小学校、三国中学、三国高校と自宅近くの学校で一八歳まで過ごしました。

三国町は福井県北部の九頭竜川河口地域にあり、半農半漁の町でした。また、古くは北前船の拠点として栄えていました。農業も水田をはじめ、水はけのよい地の利を生かしてらっきょう、スイカ

三国高校の時（左が水野氏）

なども生産されています。国営坂井北部総合農地開発事業により農業用水の確保とともに農地が整備されるなど、土地改良事業にも縁の深いところです。

家は農家ではありませんでしたが、周りは水路や農地に囲まれており、小さい頃から農業活動には非常になじみが深いところでした。また、漁業も盛んで、越前ガニで有名ですが、甘海老などもたくさん取れていました。よく食事に出されており、またエビか、またカニかと思っていました。後に東京に出てきて、その贅沢さを痛感しましたが、当時はその程度の思いでした。

瀬田　大学は難関の東京大学に入学され、農学部農業工学科農業機械学専修に進まれましたが、どのような動機からですか。

東大１年の時、教養のクラスコンパ（中央が水野氏）

三国高校から東大へ

水野医師　私が在学していた三国高校は古い歴史をもつものの、もともと女子校として創立されていました。そのためか、東京大学に進学する生徒はほとんどいない状況でした。そのような中で、高校時代の成績がまずまずだったので、まさに井の中の蛙大海を知らずで東京大学を志望先としました。

自分の実力を知ったのは浪人して駿台予備校に入ってからでした。そこの模試で、数学の問題に悪戦苦闘したのですが、試験後隣の女子生徒がこの問題はこうこうこうだから回答不能だよと即答し、世の中には頭の良い人がいるものだと思い知らされました。

これに刺激されて受験勉強に力を入れ、何とか東京大学に入学しました。もともと、エンジニアへの夢がありましたし、小さいころから慣れ親しんだ農業の影響もあったことから、専門として農業機械学を選びました。

瀬田　最近の農業は先端技術が取り入れられ、機械化も内容が大きく変わっていますね。

水野医師　その通りです。ＧＰＳを利用した高精度の自動化が進むトラクタの出現やドローンを使用した情報の収集とその解析などがかなり高度なレベルで実用化されています。私が退職するころは、まだまだトラクタの自動走行テスト程度でした。急速な進歩ですね。

瀬田　その後農林水産省に入省されるのですが、どのような業務を担当されていたのですか。

農林省に入省後、岩手県へ

水野医師　入省当時は農産園芸局の肥料機械課に配属され、官僚としての基本を学びました。

三年目に岩手県への出向を命ぜられ、農業改良普及員として水沢農業改良普及所に配属されました。今の奥州市ですが、北上川流域のこの地帯は大水田地帯です。そこで普及員としての業務を始めたのです。普及員というのは農家と直接接し、農業技術や農業経営について相談・指導を行う仕事ですが、実際にはそんな知識も技術もないので、農家の方々、市町村、農協、県の方々に接する中で親切に農業や農家の実態をはじめ様々なことを教えていただきました。直接的にはあまり関係ありませんが、今、ＭＬＢで大活躍している大谷翔平選手は水沢市の出身です。水沢市は、伊達藩ですが、隣接する北上市の相去地区に藩境塚があり、

農水省に入ったころ（旅行先の秋田県男鹿半島にて）

岩手県出向、普及員の正服で勤務

南部（盛岡）藩との境界を示しています。このように、岩手県は南部藩と伊達藩の一部が重なっているところです。

長崎県では諫早湾干拓にも

瀬田　その後はどのような業務をされていたのですが。

水野医師　その後は、本省と地方勤務を繰り返しました。岩手県から戻った後、たまたま立ち寄った銀座の喫茶店で知り合った女性と結婚しました。

本省勤務は勤務時間が不規則となりますが、農業協同組合課の課長補佐時代（平成四年）に農協法の改正を担当しました。法案の作成のための資料作りや改正案の作成などで、深夜まで勤務して終電で帰れれば幸運という状態でした。そして、朝は大臣レクのために六時過ぎには出勤するという生活でした。妻も大変心配していましたが、何とか乗り切れたことはその後のよい経験となりました。

その後、雲仙普賢岳の噴火による災害復旧対策が課題となっていた長崎県に農業技術課長として赴任しました。農業技術課は農業関連の国庫補助金、県単補助金を所管していたため、長崎県庁の人間として本省や当時の大蔵省に予算拡充のお願いに駆けずり回ったことが懐かしく思い出されます。

また、諫早湾干拓事業は洪水対策と併せ、大規模な農地、農業経営を新たに生み出す事業として工事完成に向けてラストスパートの段階になっていました。完成後の干拓地での具体的な農業構想についての議論が活発に行われ始めた時期で、県の農業試験場や農業改良普及所も所管していた農業技術課がその先頭に立っていました。

五〇歳過ぎたら、別の人生を

瀬田　そのように農林水産官僚としてキャリアを積まれている中で、医師の道を目指したのはどのような理由からですか。

水野医師　いくつかの要因があります。

もともと父が早逝しており、また、祖父も早く亡くなっていました。そういうこともあり、五〇歳を過ぎたら別の人生を歩もうという漠然とした思いがありました。

また、小学校時代に読んだ伊能忠敬の伝記からも大きな影響を受けました。

彼は五〇歳まで家業の問屋業などを継いで大きな成功を収めていました。五〇歳になり、かねてから憧れていた天文学を学ぶために江戸に出て二〇歳近く年下の学者に弟子入りし、天文学とそれに関連した測量学を修めて、あのような精緻な日本地図を作製したのです。

平均寿命五〇歳くらいの江戸時代に、五〇歳になってから新たな学びと仕事を始めて大きな成果を挙げた伊能忠敬、言うなれば人生を二度生きた生き様に感心していました。

さらに農林水産省の業務では国民に対する食料の安定的な供給や農家所得の向上などの成果を目指して政策を立案し遂行していくのですが、その成果は、一つの政策だけでなく他の政策も含めた複合的な要因が絡んでいるため即座に現れるものではありません。どうしても隔靴掻痒という感じは否めませんでした。自分の仕事に対する反応をもっと直接的に感じられる仕事をしたいと考えて

パリOECD国際会議（科学技術庁ライフサイエンス課のとき）

いました。

また、先ほどお話ししましたが、私が十九歳の時に父が亡くなりました。そのとき死因は心筋梗塞と診断されたのですが、なぜか腑に落ちないところがありました。しかし専門知識もないのでその診断を信じるしかありませんでした。さらに、自分も年を重ねると不調なところが出てきて、専門知識があればその治療もできるのにと思っていました。ただ、まだ医師になるとの確固たる意思はありませんでした。

ところが、四九歳頃北陸農政局に勤務しているときに、たまたま、新聞で六四歳の研修医という特集記事を読みました。彼女は、医学部に入学した娘を見ていて、医学の道に進みたいという希望が膨らみました。そして、勉強を重ねて五五歳で秋田大学の医学部に一般学生として入学し、還暦時に研修医となったのです。

これが、医学の道に進もうとした決定的なきっかけです。

妻は「世界一の医者になれ」と

瀬田　五〇歳を過ぎてからの転身、それも医師になるまでのハードルは高く、ご家族も心配されたのではないですか。

水野医師　妻に話したところ、本省時代の不規則な勤務などで、公務員生活は心にも体にも負担がかかるなど大変な職業であり、規則的な勤務のできる生活がよいと感じていたようでした。そのため、特に反対するということはありませんでしたが、医者になるなら「世界一」の医者になりなさいと激励してくれました。「世界一」の意味はよくわかりませんし、なれるかどうかも分かりませんでしたが、賛成してくれるということは大きな励みになりました。

瀬田　お母様はどうでしたか。

水野医師　母に話したところ、意外な事実がわかりました。

祖父は早逝しており、私が生まれたころには亡くなっていましたが、東京で産婦人科医をしていたのです。祖母が、赤ちゃんの私をあやしながら、大きくなったらおじいさんのようにお医者さんになって世のためになりなさいと毎日言っていたそうです。

そのようなこともあり、やっぱり血は争えないのかなとあまり驚きもせず、納得してくれました。

このような中で、試験勉強が始まったのです。

業務を行いながらの受験勉強

瀬田　農水省官僚としての業務を行いながらの試験勉強は大変だったのではないですか。

水野医師　その通りです。情報量の少ない中で、医師になるための道を探しましたが、大学既卒者を対象にした学士編入制度があるということを知りました。これは、当時医学部三年に編入することができ、入学後四年で卒業できるのです。医師としての活動期間をできるだけとりたいと思っていましたので、この制度に乗るしかないと思いました。当時、全国で少なくとも四〇校程度の医学部でこの制度が採用されていました。

入学試験は一般的には学力試験として英語と生命科学、それから面接という流れでした。生命科学については大学により違いがあるのですが、医学部の三年に編入することから、二年までの課程で履修する程度までが試験範囲になるのだろうと推測はしましたが、どんな形式の問題が出されるのか等は全く分からない状況でした。

英語については大学を卒業してからほとんど縁のない生活をしていましたのでゼロから始めるようなものでしたが、勉強の仕方がわかっていたのは幸いです。ただ、生命科学については全く経験もなく、情報がない中で、手当たり次第に勉強せざるを得ませんでした。その中でも放送大学の講座は大変参考になり、その効果が最大のものでした。

朝三時に起き、大宮公園で勉強

瀬田　受験の結果はいかがでしたか。

水野医師　北陸農政局の次に名古屋の肥飼料検査所、今の消費安全センターの所長になり、少し勉強する時間ができました。五〇歳の時に腕試しで初めて長崎大学を受けましたが失敗でした。ところがその半年後に名古屋大学の学力試験に合格したのです。最終的には面接で不合格となりましたが、まじめに受験勉強をすれば受かるのではないかと期待が膨らみました。

その後、勤務地が旧大宮市にあった旧農業機械化研究所、今の農研機構に変わり、その企画部長に就きました。企画部長としての付き合いがあり

ましたが、勉強する時間を確保するために、夜のお付き合いは一次会までで許して戴き、午後一〇時には就寝するようにしました。翌朝は三時頃に起床し、勉強の時間に充てました。朝の眠気を払うとともに体力維持のために、毎日近所の大宮公園まで歩き、そこの街灯の下で勉強しました。

瀬田　大変な努力を続けられていたのですね。

面接で最下位に

水野医師　しかし、簡単には結果が出ませんでした。北は旭川から南は鹿児島まで、勤務に影響しない土日に試験を実施している大学を中心に、延べ三〇校以上の大学を受験しました。やはり最初は学力試験で落ちましたが、だんだん、面接までいくようになってきました。

ところが、面接の結果はよくなりません。

ある大学は試験結果を開示していましたので、その結果を問い合わせました。入学予定者は一〇名であり、学力試験は五位でした。しかし、面接試験の結果は二七人中最下位でした。

確かに面接試験では「これから何年くらい医師として従事できるのか」などきつい質問がありました。年齢が大きく影響しているのかと思いましたが、その当時は確証もありませんでした。そうだとしても、学力試験で申し分のない成績を取ればよかろうと負けじ魂に火がつきました。後は意地でも受かるまで受け続けたというところもあります。

受験には教材の入手や、受験料、受験地までの旅費などもかかり、相当な出費になりました。そのために、妻の好きな旅行なども控えるなど、辛い思いをさせてしまいました。

現在勤務している十和田市立中央病院

もう一つ困ったことがあったのは、入試のために推薦状が必要だったことです。推薦者は本来上司ということになるのですが、管理職に就いていたこともあり、同僚でもよいということになったことから、同期の友人に書いていただきました。受験した全部の学校に出しましたので、自筆で三〇通以上の推薦状を書いていただきました。大変お世話になっていました。

金沢大学に合格

瀬田　そのような中で、金沢大学に合格したのですね。

水野医師　今思えばたまたまなのでしょうが、その入試では勉強の成果がすべて出せたとの手応えがありました。結果も相当よかったようで、入学してからも各教科での試験が続くのですが、教授から、入試の成績からは考えられない結果だねと冷やかされていました。

瀬田　全国の大学を受験されたそうですが、結果は育ちの地、福井県に近い金沢大学になりましたね。

水野医師　そうですね。

医師になろうと思いたったのは金沢にある北陸農政局勤務時ですし、医師の道の第一歩となる医学部も金沢で、何がしかの縁を感じました。

医師になるのは国家試験に合格しなければなりませんが、私が試験に合格したのはちょうど還暦を迎える年でした。医師を目指す直接のきっかけとなった新聞記事に掲載された女性医師と同じ年で研修医となったわけです。

還暦の研修医

瀬田　研修医としての活動の場を十和田市立中央病院とした理由は何ですか。

水野医師　現在の研修医制度はマッチング方式といって、研修医と受け入れる病院の相互の意思の合致により決められます。

病院を決める際に大きな影響を受けたのが、最初の地方勤務となった水沢農業改良普及所勤務でした。先ほどお話ししましたように岩手県は伊達

藩と南部藩のそれぞれの一部が合わさっていて、水沢は伊達に属し、大変気に入っていたのですが、南部の人も温かいよと言われたことが心に残っていました。南部といえば青森、青森の人も温かいのだろうなと思ったのです。

そのため大学五年の時に妻と一緒に青森を回りいくつかの病院を見学しました。その一つが十和田市立中央病院です。この病院は明るい雰囲気で、施設も新しく機能も充実していました。また、十和田市は食べ物もおいしく、近くには奥入瀬渓谷があるなど景観も優れていました。受験期間中に迷惑をかけた妻が十和田市を大変気に入ってくれたことも大きな理由です。

十和田市立中央病院に勤務

瀬田　この病院ではどのような診療を担当されているのですか。

水野医師　総合内科を担当しています。

瀬田　あまり聞き慣れない科目ですね。わかりやすく説明していただけませんか。

水野医師　公式の説明としては、総合内科として治療を担当する病状・病態は、不明熱や不定愁訴など専門診療科が特定できないもの、加齢に伴う病状、慢性呼吸器疾患、慢性肝疾患などの終末期（老衰も含む）などです。一例を挙げると、たとえば老人などでいろいろな症状が出ており、病院に行くと各診療科を回って受診しなければいけないような場合に一元的に対応しています。

診療においての基本的な姿勢は、生活する人間の視点で、総合的に疾患を診て必要な医療的支援を行うという診療姿勢です。また、救急で来院した方の観察入院、健康診断、在宅ホスピスケアを含む訪問診療も担当しています。

瀬田　お話を聞きますと、いろいろな診療科目の知識が必要なようですね

水野医師　そうですね。広範な分野の知識が求められますが、どちらかというと浅く広くという感じでしょうか。専門の医師もおりますので、たとえば救急車で搬送されてきた患者さんの症状から緊急に処置すべきことは何かとの診断をしますが、その後、どのような治療を行うかは専門医に任せていくこともあります。

総合内科の担当医

月に四回の夜間救急当番

瀬田　救急など体力的にも大変なのではないですか。

水野医師　少し前まで月に四回程度の夜間の救急当番がありましたが、ほとんど眠れない場合が多いのが実情です。このため、現在は、同僚及び上司の温情で救急当番は日中だけにしていただいています。

他に、自宅待機という制度があり、これは、救急搬送患者の疾患が総合内科に属する場合等にはすぐに病院に駆けつけ、対応する制度で、週に二、三回割り当てられます。また、主治医として入院患者に重大な問題が発生した場合もすぐに病院に駆けつけ、対応する必要があります。こんなことから現在は晩酌をすることも自重しています。

瀬田　やはり大変なお仕事ですね。また、体力も必要ですね。

水野医師　楽な仕事ではありません。ただ、農水省本省勤務時に担当した法律改正時のことを考えればまだよいのではないかと思います。

受験時の年齢や性別による差別

瀬田　東京医科大学の入試差別が話題になっていますが。

水野医師　編入試験時に感じていた年齢も判断基準の一つというのも、わからないわけではありません。

東京医科大学など医系大学の入試についての報

道では、女子や二浪以上の受験生に不利な採点がなされていたようです。しかし、人生百年と言われる中、わずか数年余計にかかることが大きな問題なるとは思えません。一方で、医師を養成するためのコストを考えれば、できる限り長い期間医師として活動することを是とする意見が多いことも事実です。ただ、私のように別の仕事について経験を積んだものが医師として活動することも必要なのではないかと思います。

公務員時代はいろいろな方との触れ合いがありました。また、関係者と協議を重ね、合意を形成して物事を成し遂げていく。その中で、いろいろな人の考え方に触れられたことも貴重な経験です。医業は人が業務の中心です。患者さんやその家族の方々の意思を尊重し、同僚医師や看護師や検査技師などとのチームワークにより治療を進めていかなければなりません。公務員としての経験もこの中で活用していきたいと考えています。

瀬田　今後はどのような道を進まれるのですか。

水野医師　現在、後期研修医としての研修期間でもあります。来年それも終了して医師として本格的に一本立ちするのですが、市の職員としては定年を迎えることとなります。このため、そのまま残るか、無医村地帯などの僻地医療に従事するか、または別の中核病院で経験を積むのかなどは全く未定の状況です。

今までの人生を振り返ると、いろいろなことが縁で結ばれているような気がします。これからいろいろと医師としての道を考えていきますが、自分ができる世のため人のための道は何なのか、天の声を聞き、それに従っていきたいと思います。

土地改良と縁の深い十和田

瀬田　さて、十和田の地は土地改良とも縁が深いところですね。

水野医師　その通りです。この辺りは台地で水が不足しており、白たもの大木が一本だけ生えていた不毛の地でした。その大木が遠くからみると三本に見えたので三本木原と呼ばれていたそうです。

幕末の頃、新渡戸稲造の祖父である新渡戸傳がこの三本木原を開拓すべしとの意見書を南部藩に提出して認められたのです。そして、かんがい用水を確保するために、十和田湖の水を利用することとしました。トンネルを掘り台地を開削し、一八五九年に稲生上水が完成して、用水が確保されました。

その後も開墾がなされていき、戦前から開拓事業が国営事業として実施され、また、戦後は逢坂（稲生）川かんがい排水事業などが実施されてきました。青森県はニンニクの産地として有名ですが、十和田市のニンニク作付け面積は日本一であり、また、肉用牛や豚の生産量も県内一など、農業県青森でも重要な位置を占めているのです。

瀬田　さすがに元農水官僚、よくご存じですね。

最後に土地改良についてもご紹介して戴きありがとうございます。

今後のご活躍をご期待申し上げ、インタビューを終わります。

水野（みずの）　隆史（たかし）

［十和田市立中央病院　総合内科医師］

福井県三国町出身。昭和53年東京大学農学部卒業。
同年、農林水産省に入省し、
岩手県水沢農業改良普及所普及員、
科学技術庁ライフサイエンス課課長補佐、
農業協同組合課課長補佐、
長崎県農業技術課長、名古屋消費安全センター所長、
農研機構企画部長等を歴任。
勤続32年目に退官し、平成22年55歳で金沢大学医学部に入学。
平成27年60歳で十和田市立中央病院に初期研修医として勤務。平成29年から現職。